「DV根絶を目指すコミュニティ音楽療法の活動――それは作曲委嘱からはじまった」

**『東京音楽療法協会30周年記念誌』**(2020) 収録原稿

草柳 和之(メンタルサービスセンター／大東文化大学)

 筆者は、長年、心理臨床の仕事に携わり、精神科医療／自治体の教育相談／民間の心理相談機関と主たる現場を移し、その特質にあった臨床スタイルに磨きをかけてきた。現在の専門領域は、ＤＶ・虐待・性暴力等のトラウマにかかわる被害－加害、そして嗜癖問題である。本稿は音楽を活用した実践の報告であるが、まずは他に例のない活動に至った背景と問題意識について述べたい。

【背景と問題意識】

 1990年、筆者は心理相談機関を開業〔1〕、その発展形として1997年、ＤＶ加害者更生プログラムの実践と研究に着手した。これは我が国最初の試みである。しかも、「被害者のケアや支援」「加害の克服と更生」という、相反する臨床課題を統合的に深化させようと力を尽くしてきた。近年、筆者は「心理療法も地産地消」を提唱しているが、創案したアプローチは、ＳＰＡ(Specified Psychotherapy for Abusers:虐待者に特化した心理療法)と命名し、欧米並の裁判所命令による加害者更生制度のない日本の実情に適合した体系である。トレーニング提供のために理論・技法上の用語も多く作った(4)(6)(8)。代表格は《加害者臨床》で、『現代のエスプリ491.2008年』にて特集テーマが組まれたが、草柳の論文(2000)が初出である(2)。『こころの科学』『精神療法』にて論文も執筆した(6)(8)。この専門誌に掲載されることは、当該分野の重要人物と見なされたに等しく、2015年に公益財団法人より賞を頂戴したことと併せ、「何とかここまでは、来た」との感がある。

 ここで仕事を志す原点となった幼稚園時の体験を記したい。夏休み前のある日、教室で園長が「皆さん、夏休みにイタズラしてお母さんを困らせるんじゃ、ありませんよ。先生はこうやって(掌を丸めて覗き)皆さんが何しても、全部見えてしまいますよー」と言うと、周囲は「ワー大変だぁ」と声をあげた。この様子に、「一体どういうことだろう」と恐くなった。「先生が全部の子を遠くから見えるなんて、そんなはずない。でも、こんな偉い人がウソを言うはずない。ウソはいけないはず。それに他の子はどう思ってるのか…」――何年も考えたが、小さな頭では何が何だか解らなかった。「人間の世界には不可解なことがある」「それを解明したい」と諦めずに執念深くやっていた結果の職業選択、学問にまで化けた。思えば実に奇妙なことだが、この5歳頃の問題意識が今も根底にある。

 話を元に戻す。実は当初より、被害者支援や女性運動の方から「そんなこと出来るはずない」「まぁだやってたんですか」等、表に裏に誹謗中傷、脅迫めいた電話、嫌がらせ、それは凄まじく(大学の人事の妨害まである)、現在も続いている。それでも多くの女性運動の集まりに出向き、文献を読み、言い分に耳を傾け、活動家と苦い対話を続けた。「人権問題がメンタルヘルスの問題を引き起こす」現実を無視したくなかったのである。実際、人間扱いでない、恐怖に晒された被害女性の厳しいケースに夥しく出会った。加害者の冷酷な仕打ちに対する女性の底知れぬ恨みと悲しみ、社会が目をそらし放置したことへの憤り――その連綿とした感情が、筆者個人に向けられている感覚さえ覚えた。幕末、種痘普及に務めた緒方洪庵は人々の偏見により石を投げられたという。女性に対する暴力を根本からなくす人類史上の最初期、かくなる苦渋も伴うのだろうが、本来、御神輿のように大勢で担ぐものであろう。

 臨床心理学にコミュニティ心理学という分野がある。これは狭義の臨床が問題発生後の対処に留まる限界を超え、問題を無くすための実践であり、予防・権利擁護・政策提言等の幅広い実践を含む(1)。ＤＶ根絶という目標に資するならば、臨床と対極の側面も取り入れたい、それが物事を発展させる、との信念を崩さなかった。やがて活動は面接室の遥か外へと展開、ＤＶ防止法改正の院内集会の参加／省庁・議員へのロビー活動／請願書名活動／国連ＮＧＯレポート執筆／家裁の調停・離婚裁判の被害者の意見書執筆など、時に女性運動と連携して次々に試みた。本稿テーマも、この種の活動の延長にある。

【stage①=『インテルメッツォ』】

◆事の始まり

 筆者は、既述のような幅広い活動を通じて、ＤＶ根絶を願う音楽の必要性を思い立ち、2001年、自らのピアノ演奏のための曲を野村誠氏〔2〕に委嘱した。それが、

■野村誠「ＤＶがなくなる日のための『インテルメッツォ(間奏曲)』」

である。曲名は「ＤＶがなくなる日までの間に演奏する曲」という意味で、「本曲が早く演奏されないことを願う」との逆説的意図が込められている。本曲は著作権がキャンセルされ、自由に演奏が可能で、社会共有の文化財である。演奏時間約6分。野村氏は日本センチュリー交響楽団コミュニティプログラムディレクター、元インドネシア国立芸術大学客員教授、今や地球狭しと活躍する作曲家・ピアニストである。

ＤＶ防止法施行直後に合わせ、2001.10.21開催のイベント《ＤＶ鎮魂の会(於:国立青少年総合センター)》にて、本曲初演が行われた。同イベントは、亡くなった被害女性の追悼セレモニーを中核に、本曲初演、ＤＶ問題に関する対談、の3部で構成された(3)(5)。

 初演までの経緯を紹介する。この特殊な構想に賛同する作曲家と出会うことが難関だった。職業演奏家でも委嘱はさほど多くなく、まして心理臨床家が委嘱するとは、前代未聞である。幸い、知人の精神科医の紹介で野村氏と会うことが決まる。2001.2、指定された所は東京オペラシティの展覧会会場、入ると不思議な物体が床に広がり、隅に人物を認める－それが全ての始まりだった。事情を説明すると、拍子抜けするほどの快諾だった。3月、氏の希望で《被害者や支援者の話を聴く会》を設けたが、余りに壮絶な話に愕然としたという。そして7月、野村氏がピアノを即興演奏し、関係者と語り合って曲想を探る会をもつ。最初の演奏は、いくら弾いても核心にたどり着かない印象だったが、感想をシェアした後の演奏は静かで瞑想的、響きに奥行きが感じられ、一同、感嘆の声を挙げた。氏は、この即興の続きを書くつもりで筆を進めたという。

 9月末に譜面が届く。見ると「！？」、変拍子と５拍子で構成されており、どちらも未経験である。練習すると様々なことが分かってきた。変拍子は運びが自然で、特段の支障はないこと、後半約1/3以降のコラールに近い楽想は才能なくして決して書けないこと、驚きは音の少ない部分に表現の深みがあること、等々。しかし一聴して強烈な印象を残す曲ではなく、どこかとらえ難い――自ら講演の際に、この曲を看板に演奏をずっと続けていく確信がもてずにいた。曲が世界に姿を現す前、作曲家と委嘱者だけが共有する秘密の時のような、至福の体験だった。

 初演は氏による体を揺らしての熱演、これもよかったが、何より終演後の聴衆の拍手が力強く、曲が快く迎えられた喜びを感じた。筆者の迷いは消え、「この曲でよい」と思えた。

◆演奏すると生じる、人々の不可解な反応

 初演以降、日本各地で機会ある毎に演奏した。2018.9第18回日本音楽療法学会《ミニコンサート》にて演奏したので、聴いた諸氏もおられよう。海外での演奏歴もある。2011.5に日韓親善宣教協力会主催による大恩教会(城南市)・韓国訪問感謝礼拝が行われた。植民地時代に弾圧で亡くなった朝鮮半島の人々への鎮魂の祈りと、3.11震災被災地への韓国民の募金(約30億円)に対する感謝が趣旨であり、筆者は心を込めて弾いた。

 ＤＶは悲惨さがつきまとうので、音楽という我々の心を直接満たしてくれる存在ならば、

抵抗感を減じる役割ができると期待した。「被害者支援の方は、ＤＶ根絶を何より大事に思い、役立つものは何でも使おうと思うはず」と考えたが、迂闊だった。講演で演奏後、女性団体の方より「こういうのも面白いですね」とか「ウチのイベントで、弾ける人がいるから演奏したい」との声は、今まで皆無である。反応を見ると、どうも「音楽は心の疲れを癒すもの」との固定観念があり、それ以外の認識はスルーのようである。つまり「このような曲は気分が重くなるから、避けたい」のである。

 セプテンバー・コンサートという平和のための音楽会がある。9.11テロの翌年、同日を音楽で平和を想う日にしようと、ＮＹの公園・カフェ他が音楽会会場となり、道行く人が耳を傾けたのが始まりである。日本では2005年、歌手の庄野真代が初めて開催、筆者は「社会の平和は家庭から」と題し、何度も出演した。実は、本曲後半のコラールは「9.11テロの衝撃から着想され、最後を変更した」と作曲者が語るので、反テロの音楽でもある。この音楽会の理念にピッタリなのだが、会場の反応は鈍かった。

 幸運な副産物も、なくはない。被害女性が本曲を練習したところ、次第に加害者は元気をなくし、意地悪が減った例を、２件伝え聞いている。

 実は《ＤＶ鎮魂の会》の際、音楽出版社の知人に参加を勧めたが、断られ「だって怖いじゃないですか? 先生(筆者)が先を行くペースに、私たちが追いつくのを待って下さい」と語っていた。また、2005.12高知県で講演＋演奏を終了後のこと。筆者は主催の自治体課長に挨拶したが、明らかに彼の唇は震えていた。しかしそれを伝えても全く無視だった。一体何を恐れているのか? 「自分の価値観が脅かされる」、「男性であることを責められる」のを恐れるのに違いない。私の演奏をバカにする人もおり、それほどＤＶ問題を深く知るのは怖いこと、それが音楽という媒体でも同じなのである。

 いくら演奏しても次の依頼に発展する訳でもなく、歓迎されない、これが現実だった。それとも「演奏に難あり」なのか。これではマズイと思いながら妙案はなく、月日が過ぎた。僅かに好ましい要素が水面下で進行していたのだが、それが顕在化するのは最近である。

【stage②=ＤＶ撲滅ソング】

◆曲の紹介

 委嘱弟2曲は、ピアノ伴奏付歌曲である。曲名と解説を以下に記したい。

■草柳和之作詞／野村誠作曲『ＤＶ撲滅ソング～ＤＶカルタを歌にした』

 ＤＶカルタはＤＶをテーマとしたカルタである。例えば「〔い〕意地悪も ここまでやれたら 才能です」「〔か〕我慢の切れ目は 縁の切れ目」等、読み札の言葉は、筆者の被害者カウンセリングや更生プログラムの経験を通じて、凝縮し結晶化したものである。い･ろ･は全44枚の読み札、絵札、解説書(15p)で構成されている(7)｡

 その読み札を編集して歌詞とした。歌詞内容は深刻にも

****

〔DVカルタ・絵札の例〕

かかわらず、音楽は明るく時に大胆、シュールだがおかし

い、このミスマッチがディープな音楽体験へと誘う。野村

氏は、カルタの句に内在する情念を、意外性と必然性の素

晴らしい同居、さらに卓越したユーモアをもって表現し

た。全4曲、演奏時間は約12分である。

〔第１曲〕童謡風の曲。ＤＶについての一般認識、ＤＶにつ

いて受け取りやすい言葉を集めた歌詞。開始の曲にふさ

わしく、誰でも歌えそうな平明さがある。

〔第２曲〕被害者の心情を表す言葉を集めた歌詞。近代フ

ランス音楽風で、哀愁漂う曲想である。ピアノが繰り返す

オブリガートの胸を高鳴らせる美しさ、意表をつく歌の旋律線、そして見事な終結部は、聴く者の心をとらえてやまない。

〔第３曲〕ドビュッシー風の開始部を持つ緩いテンポの曲。悲惨さが強い内容、ブラックユーモアの言葉を集めた歌詞。

〔第４曲〕加害者が認識すべき言葉を集めた歌詞。特徴的リズムがずっと続く舞曲風の曲で、幾分グロテスク、揶揄するようでもあり、警句のような歌詞に乗って、ノリノリに展開するさまは実にヘンで、しかも妙にハマッている。

◆本曲の成立過程、初演・再演

 まずＤＶカルタを自費制作で行った。完成間近の2013.1、野村氏に新曲プランを伝えたところ、即座に受諾された。当初、読み札の朗読にピアノ伴奏をつける予定で、3月に関係者を集め、氏の鍵盤ハーモニカ即興を背景に朗読する試演を行った。すると途中から聴き手の頭が飽和状態となり、不具合なため、旋律のある歌曲にしよう、との結論、そして氏から「読み札を歌詞らしく並べて、編集してほしい」との宿題が出た。これには頭を悩ませられたが、7月に曲の解説にある4部の歌詞群に何とか整えた。作曲も難航したが、12月に聖歌風のテーマを夢に見たとして、最初の声楽部分のスケッチが届く。少し待つと第2曲声楽部分が届き、見れば何とドリア調、しかも旋律の終わりは異様な高音でヘ長調に移行するように聴こえ、歌詞がつくとやたらオカシい。次に感動的な伴奏譜が届き、音にすると涙が滲んだ。独立したピアノ曲としても遜色はない。後は順調に進み、2014.3に疑問点の調整、5月に合わせを行って再調整し、決定稿が完成する。

 初演は、2014.9.7セプテンバー･コンサート(於･JICA東京国際センター講堂)にて、筆者独唱、ピアノ伴奏・米永志奈乃(日本クラシック音楽コンクール審査員、他)で行われた。

演奏に相応しい機会の選択が難しいが、再演もある。自治体の男女共同参画イベントにエントリーし、2017.2《With Youさいたまフェスティパル》舞台発表にて、グループ歌唱の形で再演した。本曲は「読み札＋絵札」を歌詞の順番に投影しながらの演奏が理想的形態であるが、それは2018.1･野村氏の東京芸大での特別講義の際に実現した。曲を熟知する氏の伴奏による共演は、その一体感が素晴しく、この上ない快感を味わった。

 本件は、カルタと歌曲の相乗効果を意図している。「人権啓発の教材を歌詞として歌曲を作る」という、音楽史上類例のない試みとなった。歌詞はカルタの句なので、語数もまちまち、筋立てもなく、およそ歌曲の歌詞に向かない。この悪条件にもかかわらず、各曲に特徴的な旋法・音階を割り当て、第4曲の転調を含めた調的配置の妙、4曲の楽曲形式はシンメトリー構造、といった特質により、曲集にまとまり感を与えている。この作曲者のワザに、筆者は深い感銘を覚えるのである。

◆「ＤＶ撲滅ソング」に対する人々の反応

 「ＤＶ撲滅ソング」に対する人々の反応であるが、『インテルメッツォ』と共通である。「ＤＶカルタはＤＶ問題啓発ツールとして研修や面接で活用できる一方、それが歌詞に編集されて歌曲になる、という仕掛けは実に面白い」と思うのだが、そのような声は滅多に聞かない。例えば、ＤＶの研修会にて、本曲の初演映像を披露した後、参加者から曲に対する直接の感想ではなく、奇妙な質問が発せられた。いずれも返答に窮する質問である。

●「誰が歌うんですか?」(「自分は歌わない」「誰も歌わない」という前提が隠れている)

●「これを歌うと、どうなるんですか？」(「歌っても、どうにもならない」または「効果がなければ存在価値がない」という前提が隠れている）

ここには、「自分は『ＤＶ撲滅ソング』と関わり合いをなくそう」、という意図が見て取れる。さても困ったことだが、次の扉を開くには、もう一知恵が必要である。

【stage③=パープルリボン・コンサート運動へ】

 「世の人々に『DV問題は身近に隠れているが、とても重要な問題だ』との認識を深めてもらう」〔3〕こと、「必要な人に必要な場所・情報が繋がりやすくする」こと、これが筆者の取り組むコミュニティ音楽療法〔4〕のミッションである。「ソッポを向いている人に、コッチを向かせる」・・・これは途方もない企てであろうか? 従来の実践では決定的に不足、そこで次なる仕掛けを模索して着想したのが《パープルリボン・コンサート(以下、ＰＲＣ)》である。ＰＲＣの鍵は名称と日程なので、まずはそれを示す。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　♪

〔名称〕パープルリボン＝女性への暴力の根絶を訴える国際的キャンペーン･リボン。

〔日程〕11月25日＝国連女性に対する暴力撤廃デー。毎年、国連事務総長が声明を発表している。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　♪

すなわち、演奏者はどこかに紫のリボンをつけて演奏する、毎年11月25日前後に開催という、名の利と時の利を得る設定である。

 第1回ＰＲＣ開催は、2017.12.2午後／会場:聖書キリスト教会小礼拝堂(練馬区)／主催:メンタルサービスセンター／であった。その趣旨を当日のパンフレットから抜粋する。

「これは、DV,セクハラ,性犯罪,他、女性に対する暴力をなくすことを願って、音楽家が音楽を持ち寄って奏で、聴衆とそのヴァイブレーションを共有する、という市民参加型のコンサートです。誰もが女性・男性の良好な関係を築きたいと願っているはず、それための最大級の障害が女性に対する暴力、『暴力賛成』という人は殆どいない、だから《パープルリボン・コンサート》は、多くの人々に愛されるコンサートに違いありません。」

 詳細は略すが、突如アイデアが浮かんだのは同年9月初旬、急ぎ関係者に協力を求め、知人の音楽家に手分けして出演を打診、会場確保、広報と進めて、ギリギリの12月初旬開催だった。野村作品を軸に据え、「ＤＶ撲滅ソング」の歌い手を公募した。参加者は10数名だったが、出演者の大部分が懇親会に参加、思い思いの経験を語り合えたのは、本当に喜びであった。

 出演者は、プロ・アマ、ジャンルを問わず、趣旨に賛同すれば、選曲は自由である。何らかの被害者の立場を明確にする方もいれば、当事者でない方も多い。３年間開催して、出演者数と厚みが増した。英国王立音楽院ピアノ科を首席卒業して国内外で活躍するピアニスト、ブカレスト国立音楽大学に学んだパンフルート奏者など、プロの出演者のレベルも高い。変わり種では、ウルトラマラソン「24時間走競技」2010年世界チャンピオンによるラップ(第3回)、自身の性暴力被害体験を映画化した監督による使用曲ピアノ版の演奏(第1回)もあった。第3回(2019)は参加費を上げ、収益金を都内婦人保護施設に寄付するチャリティー公演とした。次回以降も様々な工夫でＰＲＣに臨みたい。

【考察にかえて――パープルリボン・コンサート開催を通して見いだせること】

●インターネット、チラシ配布等によりＰＲＣを広報する活動は、コンサートに参加しなくても、人々のＤＶ問題などの関心を刺激する機会となる。

●出演者も知人にＰＲＣ参加を募ることになる。この主体的活動は、ささやかだが、多数の人がＤＶ等をなくす運動の負担を「御神輿かつぎ」する方式となる。

●野村作品の演奏者を公募することの意義がある。演奏者公募をすることにより、職業音楽家が２作品の存在を広める契機になると同時に、ＤＶ問題への関心を高められる。

●課題は参加者をいかに増やすか、そしてマスコミ対策である。2019年(第3回)は、出演者が多かったため、会場の席が相当埋まったが、有料の参加者は30人弱であった。参加者増のための工夫が急務である。また、ＤＶ鎮魂の会、『インテルメッツオ』、「ＤＶ撲滅ソング」、ＰＲＣ、これら毎度、マスコミに取材と情報掲載依頼を行ったが、全て報道されずに終わっている(第1･2回ＰＲＣは、ローカルのケーブルＴＶで報道された)。やはり本音は「だって怖いじゃないですか？」なのであろう。しかし、ＰＲＣ普及のためにはマスコミ報道の効果は無視できないので、さらなる対策が望まれる。

●場を提供することの意義

〔出演者側〕あるピアニストは、ＰＲＣで『インテルメッツォ』を演奏した後、本曲を積極的にコンサートで演奏し始めた。そのコンサートも、聴衆に楽しみながらＤＶ問題の存在を伝える時間となり、との連鎖反応が生まれる。出演者は軒並み「いい刺激になった」と語っているが、演奏家がＰＲＣに参加すると、価値観や音楽活動に望ましい影響を与える可能性がある。この点は、いずれ出演者への調査を行って、詳細を明らかにしていきたい。

〔参加者側〕何らかの意味での被害者も参加者していた。ＰＲＣでの音楽体験により、何らかの力を得たり、必要な人間と出会う機会となる可能性を期待したい。

●2018.11.24・第2回では、清水友美氏〔5〕によるコンテンポラリー・ダンスと筆者で『インテルメッツォ』の共演を行った。2019.11.30・第3回は、會田瑞樹氏〔6〕によるスネアドラムの即興で、同曲共演を行った。共演により、野村作品の新たな可能性を引き出せると同時に、両者ともスリルと触発感があり、筆者のエンパワメントにもなった。

●ＰＲＣは、やる気、演奏者、紫のリボンがあれば開催は簡単である。筆者の実践をヒントに、日本中で様々な工夫を凝らしたＰＲＣが開催され、「女と男の良い関係」の促進、そして非暴力の文化が広まることを願っている。音大のイベントとするのも一興であろう。適した日程も、3/8:国際女性デー、9/21:国際平和デー等が考えられる。

●日本のコミュニティ音楽療法(CMT)の実践は、従来の音楽療法から地域活動やイベント開催等へと発展した実践例が多いようである。ＰＲＣのような社会的ミッション主導のＣＭＴは、日本で稀である。海外では、Boxil,E.H.が「1988年『平和のための音楽療法』を設立し、世界中の平和を促進する積極的関与、活動家的な音楽療法を構想」し､「『あらゆる場所の暴力に反対する学生』のイニシアチブも取った｡」との報告があり(9)、ＰＲＣはこれに比較し得る。今後、この種のＣＭＴの活動の活性化も必要とされるであろう。

●最後だが、清水・會田両氏は野村氏の知人であり、『インテルメッツォ』への関心から、ＰＲＣ出演へと繋がった。すなわち、作品自体の魅力や野村氏の活躍が、水面下でＰＲＣのミッションを応援してきたのである。「音楽が、人や思いを繋げる力の素晴らしさ」を改めて実感させられる。

【参考文献】

(1)Duffy,K.G.＆ Wong,F.Y.『コミュニティ心理学』(ナカニシヤ出版)1999.

(2)草柳和之「加害者のＤＶ克服支援からの新たな視点――フェミニズムと“加害者臨床"の統合モデルに向けての試論｣ 『国立婦人教育会館研究紀要,No4,2000』

(3)－『<新版>ドメスティック･バイオレンス――男性加害者の暴力克服の試み』(岩波書店)2004.

(4)－『ＤＶ加害男性への心理臨床の試み――脱暴力プログラムの新展開』(新水社)2004.

(5)－「“非暴力を伝える音楽"のプロジェクト――ＤＶ根絶のメッセージを社会に」『the ミュージックセラピー,No.8,2005.11』 (音楽之友社）

(6)－「ＤＶ加害者更生プログラム――体系化された加害者の心理療法序論」『こころの科学,No.172,2013.11』（日本評論社）

(7)－｢(WS発表)ＤＶカルタを活用したサイコドラマ」『日本心理劇学会第19回大会抄録集,2013.11』

(8)－「加害者臨床事始め、そしてＤＶ加害者に特化した心理療法の構築へ」『精神療法,Vol.41,No.1,2015.2』（金剛出版）

(9)Stige,B.et.al.『コミュニティ音楽療法への招待』(風間書房）2019.

【注】

〔1〕メンタルサービスセンター:〒176-8799 練馬郵便局留／Tel.03-3993-6147

http://www5e.biglobe.ne.jp/~m-s-c/

〔2〕日本センチュリー交響楽団・コミュニティプログラム・ディレクター。インドネシア国立芸術大学客員教授、東京芸術大学講師等を歴任。2003年第1回アサヒビール芸術賞、他の受賞歴がある。共著『老人ホームに音楽がひびく』(晶文社）他多数。エディンバラ大学(英),マヒドン大学(タイ),フォルクヴァング大学(独),等でワークショップを行う。彼の曲は世界20カ国以上で演奏されている。

〔3〕平成15年内閣府男女共同参画局『配偶者等からの暴力に対する調査』では、身体的暴力・精神的暴力・性的暴力を受けた既婚女性の割合が、合計約3割という結果であった。この高い発生率は、誰もがいつDV被害者(加害者)の親・兄弟姉妹・子として当事者になってもおかしくない数字である。

〔4〕コミュニティ音楽療法の定義を簡潔に示すのは困難だが、Stigeの著書から恣意的に抜粋すれば、「(ＣＭＴは、)健康促進的な社会文化的参加のために正義、リソースの平等な配分、包括的条件の促進に明確に焦点化し、コミュニティにおける積極的な音楽的、社会的役割を担」う活動、と表現できる。

〔5〕ピアニスト、ダンサー、シンガー、女優。武蔵野音大ピアノ科卒。2002年Luc Ferrari氏の作品を演奏するピアニストとして1位選出。受賞歴多数｡

〔6〕打楽器奏者。武蔵野音楽大学大学院修士課程修了。日本現代音楽協会主催第9回現代音楽演奏コンクール「競楽Ⅸ」第2位入賞。湯浅譲二・間宮芳生・水野修孝他、名だたる現代作曲家の新作初演を行い、その数は200作品を超える。ＣＤを3枚リリース｡

**【内容問合せ:**メンタルサービスセンター**】**